楽園の愛すべき子どもたち

くま１０

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
楽園の愛すべき子どもたち

【Ｎコード】
Ｎ１７６９Ｆ

【作者名】
くま１０

【あらすじ】
女子高生みずきは、美しい可憐な姫を主役にした切ないファンタジー小説を書いていた。しかし彼女は何も知らなかった……その作品の世界で姫はもう一つの顔をもち、傍若無人に周囲を振り回していたことを。姫の未来は、そして混乱した世界の行く末は？文体はちょっと硬派ですが、明るく楽しいファンタジーをめざしています。

プロローグ　楽園の外側

プロローグ　楽園の外側

「ルシュド、わたくしは、わたくしの気持ちは……」

言葉が途切れる。かすかにふるえている唇は、あたかも一片の薔薇色の花びらのよう。

純白のドレスに包まれたラナウィン姫は、あまりに華奢で、あまりに美しかった――――これ以上見つめ合っていたら、我を忘れて彼女を抱きしめてしまうほどに。ルシュドは強いて目をそらし、頭を垂れた。

「それでは……私はこれで」

「ルシュド……」

引きとめたいのに、どうしても続く言葉が出てこない。ルシュドの冷たい頬にもかすかな赤みがさしている。しかし彼はいつものように無言で退出していった。

あとに残された姫の瞳は、露にぬれたうす紫の花のように、しっとり淋しくうるんでいた……。

「あッ、みずきセンパイ、も～ッ読みましたよお！！」

相原みずきが図書室に入った途端、カウンターの奥から甲高い声

が飛んできた。すっかり顔なじみになってしまった二年生の矢部奈緒だった。駆け足で近付いてきた奈緒は、相変わらずの早口で、
「ホント、ホント、すっごく良かったですー！！　もう、とにかくルシュドってばサイコーにかっこいいですよね！！　無言で去っていく最後のシーンなんて、もう、あたしゾクゾクってしちゃってー、何ていうかクールな男の美学って感じ？ってあたし何言ってるんだか！！　そうそう、それで、セン」
「わ、悪いけど、奈緒ちゃん」やっと台詞に割りこんで、みずきは人差し指を口にあてた。「ここ図書室だから……」
昼休みなので多少ざわついているとはいえ、カウンターの向こうに座っている司書の先生はしかめ面をし、振り向きざま「うるせえなあ」とつぶやく男子もいて、さすがの奈緒もあっと首をすくめた。
「スミマセ〜ン……」
「いいよいいよ、あっちでしゃべろう。今日は珍しく空いているみたいだし」
漫画コーナーのそばにある別室は、いつもなら図書委員や漫画研究部員のたまり場になっているのだが、ガラス戸の向こうには珍しく人影がなく、みずきは先に立って歩き出した。
途中で雑誌コーナーにさしかかる。この前を通ると、みずきの目は自然とラックの右上部に置かれた手作りのコピー誌をとらえてしまう。そしてその度に誇らしく、それでいてくすぐったいような気分になるのだった。
表紙を飾るのは、少女漫画風の線の細い美少年。タイトルは「クレイジーパラダイス」（内輪では略して「クレパラ」と呼んでいる）。S高校文芸部が月一で発行している自慢の部誌だ。今月はみずきの連載小説が巻頭を飾っている。みずきはちらっと見るにとどめたが、後ろを歩く奈緒は嬉しそうな声をあげて、わざわざクレパラを手にとって持ってきた。
別室に入って戸を閉めたとき、みずきは奈緒の胸元に抱かれているクレパラに気がついた。

「あ、持ってきたの、それ？」
そう言いながらパイプ椅子に座ると、奈緒は「当然ですウ」と笑ってみずきの正面に回り、ページをパラパラめくりながら立て板に水のごとくしゃべり始めた。
「ホント、すぐにでもセンパイとお話したくて、だってもうおとといは一日中感動しまくってたんですよお。センパイ、世史Ａの立石って知ってます？　でかい眼鏡かけてヒゲ生やした、ヘンなおっさんなんですけど～、何ボケーッとしとるかーって怒鳴られちゃって、でもしょうがないですよねえ、ずうっとルシュドの事ばかり考えていたんですもん。あ、そうそう、ここですウ、特にこのラストシーンがサイッコーでした～！！」
みずきは示されたそのページをひとめ見るなり、やっぱりと笑顔になった。切ないまなざしで彼を見つめる美しいラナウィン、抱きしめたいのに自らを抑えつけるしかないルシュド……みずき自身も会心の出来だったのだ。書き終えた後、何回も読み直しては頬をゆるめていたのだから。
みずきの小説「天のひかり　地のさだめ～アークザード物語～」はアークザードという斜陽の王国を舞台に、二の王女ラナウィンと、彼女の家庭教師かつ守役である最高位の賢者、ルシュドとの身分違いの恋を主軸にした波乱万丈の冒険ファンタジーである。
そもそもクレパラの読者からして女子が大半を占めているので、みずきの小説のファンもすべて女の子なのだが、その中でも特にコアなおたく少女たちによって「アークザート激激ラブ★ファンクラブ」（原文ママ）まで結成されていた（無論矢部奈緒がそのメンバーの一員であることは言うまでもない）。
「あ、あとセンパイ、これなんですけどッ」
今月のラストシーンについてなおも熱く語っていた奈緒は、ふと何かに気付くと、巻末の方へと急ぎページをくった。みずきはしかし予想がついていたので、机の上に腕組みしたまま、
「アレでしょ、人気投票募集の」

「え～ッ、分かっちゃいました～？！　そうなんですよお、もう今からすっごく楽しみで」
「確か私のは四人のキャラがエントリーされていたっけ……」
「はい、ルシュドとラナウィンとカディオン様と……あ、あとはやっぱりイクヴァイール王ですよね～！」
　奈緒が開いた見開きのページには、「第3回キャラクター人気投票、やっちゃいます！」という威勢のよいあおりとともに、右にみずきの小説、左に別の小説のキャラのイラストが百花繚乱のごとく詰め込まれている。みずきの方のイラストを担当しているのは漫研を引退したばかりの友人で、受験勉強そっちのけで各キャラの紹介文までひねり出してくれていた。男も女も等しくきらびやかなその四人の顔は、みんな右向きであったが、それはまあご愛嬌である。
　そのイラストと紹介文を少し説明してみると……
　水の流れのようにすべらかな金の髪を結い上げ、そこに花で飾ったティアラをのせ、大きな瞳、細い首、何もかもがほっそりとした美しい乙女。「優美で気品にあふれた黄昏の姫君」、ラナウィンである。
　隣にいるローブ姿の青年は、黒っぽいさらさらの髪に小さな宝石を宿した額止めをし、切れ長の涼しいまなざしで、どこか一点をきつく見据えている。こちらもたいへんな美形であるが、彼こそが「常に冷静沈着、知的な大人の魅力にあふれる姫の想われ人」、ルシュドであった。
　ルシュドの下にいるのが、ハサード・ジン・カディオン、王国が誇る青騎士団のエースであり、現在はラナウィン王女の親衛隊隊長もつとめている「開きかけた花のように美しい若き騎士」。細そうな長い髪をひとつに束ね、そのおもても騎士にあるまじきほど女性的だが、みずきの表現も「女と見まがうほどに美しい」とあるので、原作に忠実といえるだろう。
　そしてカディオンの横を占めるのが、ラナウィン姫に熱烈な想いを寄せるイクヴァイール王なのだが……（美形にはすっかり食傷気

味となってきたので、勝手ながら以下省略）。
「でもでも絶対ルシュドがトップですよね～」奈緒の口元はみごとなまでに緩んでいた。「それに、も～このルシュド、特にかっこいいと思いませんか？　前からＹＵＲＩさんってすっごく絵がうまいなあって思ってたんですけど、もうこれなんて、切り抜いてしまいたいくらいですう～！」
　ルシュドのイラストを指先で何回もなでる奈緒に、みずきは思わず苦笑いしてしまった。そして同時に、胸の底から何かがわくわくと浮き上がっていくような感覚をキャッチする。ほめ言葉によって呼び起こされるこの気持ちは、みずきにとって何物にもかえがたい快感だったし、幸せそのものでもあった。
……そう、無知な者はどの世界、どの時代においても幸いである……

第一章　楽園の迷える子どもたち（1）

第一章　楽園の迷える子どもたち（1）

青騎士団の見習い女騎士ハヤは、読んでいた論理学の本をいったん閉じた。隣室の扉が開いて、彼女の控える部屋の前を静かな足音が横切ったのだ。ルシュド殿だ、とハヤは察し、本の続きに戻ろうとしたが、すかさず隣からよく響く声が彼女を呼んだ。

「ハヤ！　ルシュドを追いかけなさい！　そして捕まえたらもう一回ここまで連れてきて！」

あわててハヤは立ち上がった。「その時」が来てもオロオロすることはなくなったが、相変わらず＜夜の姫様＞の行動は読めないままだ。とはいえ、命令は絶対である。

「は、はッ、ただいま！」

ハヤは本を放り投げ、剣もとらずに部屋を飛び出した。足音はひそやかだったのに、ルシュドの姿はすでに消えている。足音の行き先を追って廊下の角を曲がり、階段を駆け下り、正面ホールを見回してさらに庭園に出てみたが、美貌の賢者を見つけることはできなかった。我知らず、太いため息が出てしまう。

（また、怒られる……私にも「その時」が分かれば、姫様の突飛なお言いつけにもすばやく対処できるのに）

しかしすぐに彼女はその考えを却下した。「その時」が分かる人物は、二の君自身と賢者ルシュドだけ……。無礼きわまるが、あのお二人のような二重人格者になるのはゴメンだった。

二の君――すなわちアークザード王国の二の王女ラナウィンは、すっぽりと上体をつつみこむ大きな貝殻のような籐椅子に身を沈めて、いらいらと椅子のふちを指でたたいていた。そして、背を丸めて帰ってきたハヤに冷たい一瞥だけくれて、

「よく手ぶらで戻ってこられるわね。まあもっとも、上首尾だった

試しがないけれど」
「……申し訳ございません……」
こういう時、娘らしからぬ自分の巨体を恨めしく思う。いくら縮こまっても不恰好に空間を占拠しているような気がするのだ。あごが胸元にくっつきそうなほどうつむいて、更なる叱責を覚悟したハヤだったが、意外なことに姫は力のない声で「もういいわ、お下がり」とぽつんと言い捨て、立ち上がってしまったのである。
「え……？」
びっくりしてハヤが顔を上げると、壁一面のぜいたくなガラス窓は日の光に満ち満ちて、窓辺に立つ姫の姿をさらに真っ白く輝かせていた。窓の外を見ているのか、その表情をこちらからうかがい知る事はできない。それが人の好いハヤにとってはかえって気がかりで、このまま下がってよいかためらっているうちに、扉がノックされてこれまた麗しい青年が入ってきた。
親衛隊隊長のカディオンだった。群青のビロード地に金銀糸刺繍をほどこした豪奢な鎧長衣が、彼の美しさを一層引き立たせている。

「やっぱり。ハヤはいつも貧乏くじを引いてしまうね」カディオンはあでやかな笑顔を見せ、姫よりも先にハヤに声をかけた。「気になってきてみれば、また＜夜の姫様＞のわがままに振り回されていたんだろう？　後は引き受けるから訓練場に行ってきなさい。槍の本稽古が始まっているから」
「は、はい、では失礼いたします……」
姫と隊長それぞれに挨拶をして扉をなるべく静かに閉じた途端、ハヤはいっきに脱力してしまった。上京してまだ半年足らず、見習い騎士のハヤにしてみれば隊長も姫様も空のかなたの綺羅星のような存在だ。だから正直言って、自分のことなど無視してくれる位の方が気が楽なのだが……。
（＜夜の姫様＞に切り替わる時は隊長のおっしゃる通りたいてい私が当番だし、隊長は隊長で、公明正大なお方だからいつも何かと目

をかけて下さるし……本当ありがたいよ、ありがたいんだけど）
隣の控え室に入り置き忘れた剣を腰につけながら、つい「疲れる……」と声に出してしまい、ハヤはぶるぶるぶるっと頭を振った。そして大急ぎで訓練場のある離れの兵舎へ駆け出していった。
一方ラナウィン姫の私室では、純白のドレスにレースの肩掛けをはおった姫と、白銀につやめく髪を右肩でゆるく結んだカディオンが、静かに優雅な会話を交わしている――――わけもなく。
「呼んでもないのに何で来たのよ」
「逃げるように帰って行くルシュドを見かけたものですから。彼がああなら十中八九、姫様も＜夜＞におなりでしょうし、かわいい部下がいびられるのを放っておくわけにはまいりませんよ」
姫はわざと盛大に鼻息をならした。
「なーにが『かわいい部下』よ、こないだの当番、誰かしら、けっこうきれいな女の子を泣かせてしまった時は全然顔も見せなかったくせに」
「そうでございますか？」
「そうよ、何か知らないけどハヤをチクチクいじめている時に限っておまえがしゃしゃり出てくるのよ。そんなにハヤが気にかかる？
あの子、芯はしっかりしているから田舎に帰ったりしないわよ。昨今の騎士不足は、まあ確かに懸案事項ではあるけれど」
いじめているという自覚はあるんだな、とカディオンは変なところで感心し、それからふうっと息を抜くように微笑んだ。
「いいえ、姫様。これは個人的事情です。私はハヤが好きなのですよ」
「ふうん、好き……」何となくそのせりふを繰り返した姫は次の瞬間、髪飾りが吹っ飛びそうな勢いで振り向いた。「って、ええっ、好きって、その好き？！　あ、愛してるとかの好き？！」
「姫様、仮にも一国の王女であらせられるのですから、意味が通じるようにお話なされませんと」
「お、お黙り！　聞いているのはわたくしよ、何よ、一体どちらな

のよ？」
　姫の足元、花葉模様の絨毯に陽だまりがおちている。カディオンは目を細めながらその温かさを胸におさめ、穏やかに答えた。
「不覚にも私の一目ぼれです。あとはもう可愛くなる一方ですね」
　恥ずかしげも無く告白する隊長に、姫は毒気を抜かれて籐椅子にへたり込んだ。純白のドレスはしわだらけになってしまうだろうが、そんな事を気にする余裕もない。
「道理で浮いた話の一つもなかったわけね……そうなの、ハヤねえ、ハヤかあ……」
「何かご不満な点でも？」
「う～、不満というか、気に食わない」きっぱりそう言い切って、姫は籐椅子の中で体を左向きに変え頬杖をついた。「だってハヤが可哀想。見た目だけは人畜無害なこんな男につけ狙われるなんて……こうなったら邪魔しちゃおうかしら」
　ひどい言われようだがカディオンはこたえた様子もなく、思慮深げに口に手をやって、
「なるほど、本日もまたルシュドとの間に、まったくご進展が見られなかったのでございますね。だからといって忠実な家来の恋路を妬まれるのは……」
「どうしてそうなるのよっ！！」
「おや、違いましたか？」
　わざととぼけた切り返しにさすがの姫も言葉を詰まらせる。しかしそこは＜夜の姫＞、すぐにふんぞり返ってものすごい勢いでまくしたてた。
「ええお生憎さま、おまえがどう邪推しようと勝手だけど今日はちゃんと進展があったんだから、まあ所詮一方通行中のおまえには想像も出来ないでしょうけどね、静謐な光の中わたくしたちはお互いだけを見つめ合い瞳で想いのすべてを物語って……」
　と、唐突に姫の口が「え」のかたちで固まった。自分のうかつさにやっと気づいたようだ。カディオンが今回ばかりは気の毒そうに

首を振る。
「姫様、それは拝察するに＜昼＞なのではございませんか……」
「……し、仕方ないじゃない、あれだってわたくしには違いないんだから……」
「ではいっそのこと、＜昼＞の方で恋路を成就されてもよいではありませんか」カディオンの口調がにわかに熱を帯びる。「私が申し上げるのは僭越ですが、＜夜＞のルシュドが姫様に告白するのは飛竜に軽業を仕込むより困難だと思いますよ。姫様に頼まれてルシュドにハッパをかけているものの、あんなに気弱では見込みがないというか、毎回不毛なやり取りの繰り返しでこちらまで気が滅入りそうです」
「……」
「姫様？」
「……は嫌」
うつむいていた姫は決然とおもてを上げ、さらに身を乗り出して怒鳴るように宣言した。薄紫の瞳が心なしかうるんでいる。
「それだけは絶対に嫌よ！　確かにさっき、わたくしはルシュドに思いのたけを伝えようとしたわ。彼に抱きしめられそうなそんな予感さえしていたの……でも、あれは、あのわたくしは非の打ち所のない完璧な＜昼の二の君＞、労せずして誰からも愛されるのよ。ルシュドだって例外でないわ。だけどルシュドには、今のわたくしも愛してほしい、出来ることなら＜昼＞よりも先にわたくしを認めて受け止めてほしいのよ……！」
　沈黙が、落ちる――――空気がまだふるえているようなそんな沈黙。窓は少し開いているはずなのに、離れで訓練している騎士たちの掛け声も本当に微かにしか聞こえてこない。半透明のカーテンがそよ風にさらさらと揺れ、幾重の襞は絶え間なくかたちを変える。そんな光景を見るともなしに見ていたカディオンは、ためらいながらも口を開いた。
「恐れながら、夜と昼は並び立たぬものでございますれば、今の姫

様に愛を告白できる者といえば＜夜＞のルシュドの方しか……」
「もちろん分かっているわ、カディオン」隊長の言葉を途中でさえぎり、姫は強気に微笑んだ。「完全無欠の格好いい＜昼＞のルシュドはもちろん好きよ。陳腐な表現だけれど、出会う前からそう定めづけられていたというか、神の御手に導かれているようなそんな揺るぎない絆を感じるの。でも……＜夜＞のルシュドは違う。彼と一緒にいてもわたくしは不安でたまらない。愛してくれているかどうかも分からない。だからわたくしは＜夜＞のルシュドが憎たらしくて、腹立たしくて――――大好きなのよ」
「……確認いたしますが、その大好きというのは、愛しているの好きでございますね？」
へたな冗談に姫の顔が崩れ、泣き笑いのような表情になった。
「そうね、一目ぼれではないけれど。まあそれにもしかしたら、＜昼＞のわたくしと張り合っているだけかもしれないわ。どちらが先に結ばれるかって。わたくし負けず嫌いだもの」
ほがらかな口調でそう締めくくり、居住まいを正した姫に、カディオンは沈黙するしかなかった。そんな浅はかなものではないと否定するのは簡単だが、そうしてみたところで彼に一体何ができるのか。
逡巡しても仕方なかった。だから彼は髪を払い、恭しく一礼した。
「つい長居してしまいました。御前失礼いたします。副隊長だけだと稽古が締まらないので」
無言でこくりとうなずいた姫は、精緻なかたかけを胸元でそっと合わせたその姿は、＜昼の姫＞よりもずっとはかなげに見えてカディオンは一瞬目を疑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1769f/

楽園の愛すべき子どもたち

2010年10月15日20時50分発行